

自己決定の手段的価値とその限界性

—自己責任論への反論の仕方の検討—

○ 関東学院大学 氏名 石川 時子 (会員番号 6605)

キーワード3つ：自己決定、価値、自己責任

1. 研究目的

2000年代以降、社会福祉政策および実践において、「自己決定」はますます重要な位置を占めている。自己決定とは、困難を抱えた利用者だけに決定を押し付けるのではなく、当事者の声やソーシャルワーク上の議論を受け、それを他者がどのように支援するか、方法論が磨かれてきた。一方で、何のために自己決定するのか、どのような自己決定が望ましいとされているのか、価値に対する問いは多くないが、価値論が孕んでいる問題点を指摘する研究も出てきている。本研究では、自己決定の価値に関する議論の整理を行い、それらが提示する新たな価値に関する議論や、その場合に再び生じる、あるいはどのように新しい問題点があるのか、議論動向の検討と整理を行うことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、社会福祉学の中でも特に、ソーシャルワーク論上での自己決定の価値の議論に注目する。クライアントの自己決定の重要性は、ソーシャルワーク論上では長らく強調され過ぎてきたために、既に自明の価値あるものとして位置づけられてきた傾向にある。しかし、貧困問題など初期のケースワークが対象としてきた、「自己決定できるようにクライアントを育てる」というような視点では、「自己決定できる人／できない人」の二分を生み出し、重度の知的障害者や認知症を持つ高齢者などを射程外に置きかねない問題が指摘されてきている（衣笠, 2009、田中, 2010）。本研究では①自己決定の「手段的価値」についてまとめ、②自己決定の価値に関する批判や問題点に関する議論の整理、③「自己決定＝自己責任」論批判の成否、④新たな価値に関する議論の方向性、について検討したい。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究を行う。日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し、先行研究の引用法や研究成果の公表について十分な配慮を行う。なお、参考文献は抄録では簡略化しており、当日の配布資料にて文献リストを付け加える。

4. 研究結果

ソーシャルワーク理論が発展する中で多くの理論家がクライアントの自己決定の重要

性について触れ、IFSW および各国のソーシャルワーカーの倫理綱領でも行動指針などに自己決定が掲げられており、「バイステックの7原則」など現在でもソーシャルワーク教育の中で必ず引用されている。クライアントの自己決定の重要性はあまりに長く論じられているために、それ自体が既に価値あるものとして自明視される「本質的価値 intrinsic value」を有しているとみなされる傾向もある。しかし自己決定はより上位の価値である、「自由」や「尊厳」を達成するために価値があるとみなす「手段的価値 instrumental value」を有しているといえる (Dworkin, 1988、Horne, 1999、石川, 2012)。一方で、近年は自己決定が単に個人が単独で行うものではなく、他者からの支援や協力を得て決める「支援された／協働（協同）の／共有された・自己決定」の論もあるが（沖倉, 2012）、日本の制度上の「自立」を冠する政策では、再び経済的自立の支援を強化する方向にあるように、自己決定支援自体が、人的・経済的負担を削減するために実践されてしまう側面もある。この理由には、「自己決定に価値があるのは何らかの手段を達成するため」と解釈する「手段的価値」自体が、常にアポリアをもたらしてしまうためである（衣笠, 2018）。また、未だ救済されないニーズや、特に貧困の問題に対しては、「自己決定＝自己責任」の対概念を推奨する言説を招きやすいといった、自己決定に「価値」を見出す議論が個人責任の追及をもたらすなど、好ましくないという疑義が呈されている。この「自己決定＝自己責任」の対概念に対する批判は、貧困やワーキング・プア、社会保障関連で論じられているが（河添, 2013、雨宮, 2017）、この反・自己責任論ともいえるべき批判自体が、成功しているとは言い難い側面もある（石川, 2017）。

5. 考察

「自己決定＝自己責任」論を超えるためには、自己決定に手段的価値を置くこと、あるいは「価値」の見直しをする議論（衣笠, 2018）や、自己責任論を超えた、あるいは「新たな責任」に関する議論もあるが（中村, 2010）、その場合、別な価値論や方法論に対する疑義が生じてしまう。価値論では、尊厳や自由といった上位概念を検討すると、Kant や Mill にまで遡った議論に依拠し、現代にそぐわないか、手段的価値に繰り返し決着をみることで予想される。また方法論では、反・自己責任論で提示される方法は、個人に責めを負わせることを不憫に感じ、他者へ共感する能力を持つ者だけが負担を分かち合うことになってしまう危惧がある。連帯や共感、他者への応答といった議論が、自己決定の価値の問題、「自己決定＝自己責任」論批判へ成功しているのか、議論の展開を整理する。